

2022.9.11 年間第24主日

一匹の羊、一枚の銀貨、一人の息子

ルカによる福音書 15:1-32

徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで探し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。

あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話を

させた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物してくれる人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。

「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死ん

でいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」

説教

きょうの3つのたとえ話は「喪失」はなしです。一匹の羊、一枚の銀貨、一人の息子を失ったが見つかった、よかったねという話です。最初の二つのたとえ話は「一緒に喜んでください」と同じ文章で締めくくられています。

そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。15:5-6

そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。15:9

しかし、放蕩息子のたとえでは「一緒に喜んでください」とはなりません。

すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」15:31-32

父親は「喜ぶのは当たり前」といっていますが、長男は子牛がどうの子ヤギがどうのといっただけで、この兄弟は仲が悪いようだし、父親も野良仕事から戻るのを待って宴会をはじめるときの気遣いがあつたら長男もそこまでふてくされることもなかったのではないかと、とも思います。

では、視点を変えて羊は見つからず、銀貨も探したけれど無かったという話だったらどうなるでしょう。喜ぶはなしにはなりませんから近所の人を呼んで「いっしょに悲しんでください」となるのでしょうか。

喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。ローマの信徒への手紙 12:15

パウロの薦めにならって、やっぱり近所の人たちといっしょに泣くのでしよう。

さて、一人の息子のケースだとどうなるでしょう？ 弟が帰ってこなかったらどうなるでしょう。お父さんの、そして長男の気持ちはどうなるでしょう。泣くこともあるかもしれませんが、もともといないのだから特別に泣こうという気持ちにもならないかもしれません。人間の気持ちは泣いたり笑ったりですが「神の気持ちは」はどうなるのか。

大きな喜びが天にある。 15:7

神の天使たちの間に喜びがある。 15:10

これをさかさまにすると、大きな悲しみが天にあり、神の天使たちの間に悲しみがあふ、となります。だとすると放蕩し破産して逃げ帰った弟のケースでも同じように天に悲しみがあふのでしよう。一匹の羊、一枚の銀貨、一人の放蕩息子が「戻ってくるか、こないか」このことが神さまの一大関心事だということが読み取れます。

神の似姿として造られたわたしたちが、神の被造物である世界のすべてが、神のもとに立ち返ることができますように。

使徒信条

わたしは、天地の造り主、全能の父である神を信じます。

また、その独り子、わたしたちの主イエス・キリストを信じます。

主は聖霊によって宿り、おとめマリヤから生まれ（ここで礼をする）ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、よみに降り、三日目に死人のうちからよみがえり、天に昇られました。

そして全能の父である神の右に座しておられます。そこから主は生きている

人と死んだ人とを審くために来られます。

また、聖霊を信じます。† 聖なる共同の公会、聖徒の交わり、罪の赦し、体のよみがえり、永遠の命を信じます アーメン

共同祈願

限りない愛を注がれる神に信頼して祈りましょう。

- ・神がわたしたち一人ひとりを探し求めていることに気づかせてください。人の思いを越える神の愛を悟っていくことがでいますように。

- ・創造主のみ心から離れてしまう人間にあわれみを注いでください。いのちの恵みの源に目を向け、感謝の心を取り戻すことができますように。

- ・わたしたちが失意の中にあるとき、み失われた人を探しに来てくださる主によってカづけられ、希望のうちに立ち上がることができますように。

- ・（あなたに必要な祈りを追加してお祈りしてください）

神よ、あなたに立ち帰る恵みを与えてください。

わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン